

古墳壁画の保存活用に関する検討会（第36回）議事要旨

1. 日時 令和7年2月27日（木）13:15～15:30

2. 場所 京都府庁3号館B1講堂

3. 出席者 <委員>

和田座長、岡林委員、佐野委員、染川委員、成瀬委員、銚井委員、三村委員、森川委員、柳澤伊佐男委員、柳澤秋介委員

（オンライン）小林委員、里中委員、高鳥委員、林部委員、矢島委員、杉村委員（代理）

<事務局>

文化庁：山下文化財鑑査官、今泉文化財審議官、塩川文化資源活用課長・古墳壁画室室長、作田文化資源活用課長補佐、米村古墳壁画対策調査官
他

（オンライン）田中文化財第二課長・古墳壁画室室長補佐

独立行政法人国立文化財機構

東京文化財研究所：犬塚材料調査班長（保存科学研究センターセンター長）、早川修復材料研究室長（保存科学研究センター副センター長）、佐藤保存科学研究センター生物科学研究室長、秋山保存環境研究室長 ほか

奈良文化財研究所：高妻企画調整部文化財情報研究室長、脇谷埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長、栗山企画調整部専門職員、石橋飛鳥資料館学芸室長、廣瀬飛鳥資料館古墳壁画室長 ほか

皇居三の丸尚蔵館：建石学芸部長

一般社団法人 国宝修理装演師連盟：山本代表理事他

4. 概要

(1) 議事

・米村調査官より、「資料2 国宝高松塚古墳壁画及び国宝キトラ古墳壁画の今後の方針について」の説明を行った。

岡林委員：新施設の設置とその後の古墳へ戻すという将来的な方針を明記したのは、非常にいいこと。新施設での保存管理の対象は壁画と石材だが、高松塚古墳の解体調査で取り出されたものには、例えば壁画が描かれた漆喰面の裏側や石室の裏側の目地漆喰、土層の剥ぎ取り等もある。考古学の大原則としては、壁画も石材も含めて発掘調査で出土したものは一括で保管すべきである。奈良文化財研究所で保管されている当時の様々な資料類を今後どのように取り扱うかも含めて、方針を整理したほうがよいのではないか。

米村調査官：「資料3-2 高松塚古墳壁画保存管理公開活用施設（新施設）の令和6年度実施項目と令和7年度の予定について」に記載したとおり、資料をリスト化している。「今後の方針」の更新についてどのように記載するかは、調整していきたい。

矢島委員：現地保存の原則に即して、壁画、石材石室を墳丘に戻すことが明記されているのは大変ありがたく、この方針に賛成だ。諸資料の扱いについても、何らかの形で触れていただきたい。

柳澤（伊）委員：高松塚古墳の本質的価値は、現在、文化財として指定されているもの以外にも含まれている。イコモスの現地視察等の調査において「壁画古墳の本質的価値とは何か」と問われた場合に、壁画と石材だけ戻すということで通用するのかどうかという考え方もあるので、検討してほしい。

和田座長：キトラ古墳の「辰」「巳」「申」の安定化処置と保存管理」とは、具体的にどういう内容なのか。

米村調査官：昨年度の検討会で安定化処置の着手に了承いただき、今年度、作業を進めている。保存管理については、キトラ古墳壁画保存管理施設で、再構成した壁面の該当場所に一体化するのが基本的なスタイルと考えている。具体的な方法は、技術的なことも併せてプロジェクトのメンバーとも相談のうえ、次回以降の検討会で明確に示せるようにしたい。

柳澤（秋）委員：「国営飛鳥歴史公園北西エリア」という記載があるが、オフィシャルになり名前なので、「現仮設修理施設に近接する」等の表現に変更していただきたい。

米村調査官：基本構想から使っていた表現だが、オフィシャルに使える名称に書き変えたい。

- ・作田課長補佐より、「資料3-1 高松塚古墳壁画保存管理公開活用施設（新施設）整備令和7年度予算額（案）」の説明を行った。
- ・米村調査官より、「資料3-2 高松塚古墳壁画保存管理公開活用施設（仮称）について」の説明を行った。

三村委員：「資料3-1」の「事業内容」に、「地盤調査、敷地調査、地震動作成・解析調査」とあるが、想定している断層など、具体的な手法は決まっているのか。奈良県では、東側に奈良県東縁断層帯、西に生駒断層帯があって、頻繁に動いてはいないが動いた場合には結構な影響が出る可能性がある。設計のための地震動というイメージなのか、被害想定を行う場合は最もシビアな状況を想定することになる。国営飛鳥歴史公園館の建設時のデータはあると思うが、より深部の地震動の基盤となるところまで把握する必要がある。調査の意図を明確にし、地下の情報についてある程度説明がつくようにしておく必要がある。

米村調査官：これまでに、この地域に届いた地震を想定している。いただいた御意見も踏まえて検討していきたい。

林部委員：3つの文言のうち1つめと3つめの文言については、飛鳥の独自性を踏まえたものにすべき。国家形成に関わる要素や飛鳥の地域性を入れたほうが、新施設のコネクトとして訴えるものになると思うので、検討いただきたい。

矢島委員：具体的な設計や内容づくりが始まっているので、運用スタッフを早い時期に固めて、計画段階から参画できるように考えていただきたい。

米村調査官：重要な指摘であり、必要と考えている。「資料3-2」「2. 令和7年度実施予定項目」「運営体制案の検討」において、その部分を含めて考えていきたい。

小林委員：「資料3-2」の「2. 令和7年度実施予定項目」に「国交省と一体的に実施」とある。展示において、連続性とすみ分けは重要な問題で、検討を進める段階から、文化庁エリアと国交省エリアの一体的な整合性をもって、来場者に連続性のある展示コンテンツを提供できるような進め方をしていただきたい。

柳澤（伊）委員：この施設には、重要文化財等を取り扱う人は常駐するか。

米村調査官：運営体制を検討しているところである。

森川委員：一体的に検討する体制ができつつあり、来年度から本格的に計画づくりに入っていくとのこと、ありがたく思っている。来場者にとって面白く、楽しく、知恵になることが大切だ。高松塚古墳以外にも古墳が多いゾーンに位置するため、古

墳全体や、世界遺産で挙げられている宮殿と古墳と仏教寺院の3要素とのつながりなども説明いただきたい。さらに、中国、韓半島との国際交流は非常に重要で、世界遺産登録に向けた大きな論点だったので、中国や韓半島との比較などが必要になる。費用負担の問題もあるが、明日香村としては、明日香村で運営しているガイドに勉強していただくための場所づくりもお願いしたい。例えばドローンで見た映像やメタバース等も活用すると、全体像が分かりやすくなるので、検討いただきたい。また、日本に高い興味を持つ世界中の方々にアピールできるため、無料にこだわらず特別な体験もできるという視点があってもよい。

「資料3-2」「新施設のコンセプト」に「飛鳥の色彩を未来へ」とあるが、過去の素晴らしいものを説明するとともに、未来に向かってどうするかについて、次世代に響くような展示、ミュージアムショップや休憩スペース、イベント空間等も併設すると、この言葉が生きてくる。

和田座長：中国、朝鮮半島の文化が日本列島に伝わって、日本的なものとなって出現したものが高松塚やキトラの特徴なので、飛鳥、日本列島、東アジアの中で、高松塚が占める位置を表現できるように展示し、文化庁と国交省の関係者が歩み寄っての融合的な施設運営を期待したい。コンセッション方式も含めて機能できるようにお願いしたい。また、新施設にも良い愛称を考えてほしい。

柳澤（秋）委員：特に展示について、従前からのように、文化庁と一緒に協議しながら進めていきたい。また、「資料3-1」の新施設整備について、国交省としても、まだ国会で予算審議中だが、この動きに合わせた予算の確保を念頭に置いて進めている。新施設整備に向けて公園事務所を仮移転する必要があるため、令和7年度中の仮移転を調整中である。

・廣瀬室長、石橋室長、栗山主任より、「資料4-1 高松塚古墳壁及びキトラ古墳の保存活用について」の説明を行った。

柳澤（伊）委員：活用面で検討していることはあるか。

石橋室長：赤外の画像は、壁画公開のパンフレット等のコンテンツに使っていくほか、トレース図的なものも作成して活用したい。

林部委員：高松塚のVRを活用したコンテンツ開発について、新しい調査データや研究データに基づき更新可能とするとともに、技術の進歩に対応できるシステムにしておく必要がある。また、子供にも楽しみながら見てもらえるものを作成いただき

たい。「20分」は長いので、使っていく中で考えていただきたい。2点目の地図について、将来的に新施設での公開等は検討しているか。

廣瀬室長：データの汎用性は、意識している。また、子供向けという意見に対しても、データ上での改変は作業しやすいのが1つのメリットなので、いろいろな見せ方、見える化を進めていきたい。例えば石室が開口している古墳の調査資料をもとに、現状では見えない古墳の中を見られるようにすることも可能。理想は、発掘調査データが全て1つのベースマップの上に掲載され、自由に引き出せるような形を想定している。詳しく見たい方、もう少し簡単に見たい方等、多様な方に向けてデータを蓄積していきたい。2つめの質問の図2については、ベースマップだと思っている。航空写真は、植生がある状況から植生を透過して生の地形を見るなど、多様な活用策がある。現地での展示は20分が長ければ、短縮するなど、改良できる。いろいろな形を模索して、幅広く楽しんでいただきたい。

・早川副センター長・室長より、「資料4-2 国宝高松塚古墳壁画及び国宝キトラ古墳壁画のメンテナンス等」の説明を行った。

和田座長：泥に反転した、難しい「午」の扱いは検討中だが、その他は順調にいつていると考えてよろしいか。

早川副センター長・室長：その通りである。

・犬塚センター長・室長より、「資料4-3 国宝高松塚古墳壁画及び国宝キトラ古墳壁画の材料調査について」の説明を行った。

成瀬委員：顔料と染料のデータは、どういうもので作成したのか、教えていただきたい。

犬塚センター長・室長：高松塚古墳壁画の分析を想定しているので、当時使われたと想定される顔料、染料を使用した。具体的には、漆喰のプレートを用意し、そこに高松塚の場合には鉛白が使用されていると考えられるので、カルサイトの下地に対して鉛白を施して、その上に顔料や染料を塗布した。

和田座長：顔料と染料と両方使われているということか。

犬塚センター長・室長：現在までの分析結果では特定できていないが、様々な可能性を考えて、基準として作成している。

・佐藤室長、脇谷室長より、「資料4-4 国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設及び国宝キト

ラ古墳壁画保存管理施設の保存環境について」の説明を行った。

銚井委員：地道なメンテナンス作業のおかげで、古墳壁画が保管されていると伺い安心した。

また、環境管理指針を過去のデータに基づいて策定されるとのことで、楽しみだ。

・米村調査官より、「資料5 国宝キトラ古墳壁画の公開（第33・34回）及び国宝高松塚古墳壁画修理作業室の公開（第47・48回）について」「資料6 特別史跡高松塚古墳の追加指定について」の説明を行った。

和田座長：佐野委員、染川委員から御意見をいただきたい。

佐野委員：これまでの検討会で、当初は推測だったものがかなり確定されてきているということに対して大きな喜びであると同時に、この長い年月の間、現状を保存するなかで様々な熱意と努力が積み重ねられて今があるのだなと感じて、たいへん感慨深い。これらが最終的に国交省と文化庁による共同の大きな施設で、多くの国民の皆さんに見ていただけることが目前に迫っているのは大変うれしい。

染川委員：「資料6」の3行は、高松塚古墳を一般に知らせるときにすごく大事な部分で、「資料3-2」の「新施設のコネクト」に、少し魅力的な言葉で一般化するといい。高松塚古墳を全く知らない人が多くいるという気持ちで新施設に取り組んでいただきたい。同様に「資料4-1」のVRについても、今の人々が見て「楽しくて行きたい」と思うようなアウトプットの入門版を、中学生、高校生、大学生の一般の人たちと相談するようなプロジェクトとして検討していくとよい。

里中委員：どうアピールするかということについて、中国の西安の陝西博物館を思い出した。中国の墳墓の壁画はとにかく大きく、博物館のメインの展示室に、同時期の日本の古墳に描かれた壁画として高松塚古墳壁画のレプリカが展示されていた。中国の壁画に比べて高松塚の絵は大変小さいものの、実に緻密で美しい絵だ。日本人の価値観や小さいが緻密な絵を残していることなどを子供たちに伝えるように説明できれば、そこから興味が広がっていくはずだ。大きさを比べるのではなく、小さい空間の中に宇宙を築こうとしたという、当時の人たちの思いを伝える。省庁の垣根を越えて、我が国の文化、価値観を伝えようという取り組みが大きな花開くときがいよいよやってきたとわくわくしている。

高鳥委員：「資料2」「今後の方針」で、最終的には現地で管理するとされている。非常に遠い先のことになるかもしれないが、「やるならばやる」という気構えでやっていかなければならない。また、壁画古墳で壁画がうまく守られている事例はどの程

度あるのかについて、今後の検討会で示していただきたい。

成瀬委員：地球温暖化の話で、奈良市では、1900年から1970年の高松塚が見つかった頃までは平均気温が14.2～14.3℃だったのが、問題が生じた2000年度頃には15.0℃程度に上昇し、2010年から急上昇して、去年は17℃になった。どこで止まるか分からない状況で、新施設ではこうした状況も踏まえて、余力のある施設にさせていただきたい。また、壁画を戻すのであれば、平均気温が何℃まで上がるか分からないような環境で保存していくということを十分御承知おきいただきたい。

・西調査官より、「資料7 「飛鳥・藤原の宮都」の世界遺産推薦に係る閣議了解について」の説明を行った。

佐野委員：「1. 概要」の第2段落の「東アジアの古代国家形成期において、中央集権体制が誕生・成立した過程を、2つの連続する時代」云々とあるが、中央集権体制が誕生・成立した過程というのは、日本列島においてであり、東アジア全体で考えると、古代国家形成期において中央集権体制が誕生・成立した過程は、もう少し早い時期にあるので、少し気になる。

西調査官：世界遺産の場合、同種のを比較した上でどのような特徴があるかを示さなくてはいけないというルールがある。世界中を比較した中から、1つのまとまりとして東アジアの古代国家形成期を主たるターゲットとして設定した。ただ、指摘の通り、飛鳥・藤原は日本の中央集権体制が誕生・成立した過程を示している。誤解のないように注意しながら進めていきたい。

今泉審議官：これまで構想・準備してきたものがやっと目に見えつつあるが、その確実な実現には様々な関門が控えており、確実に達成しなくてはいけない。大陸、朝鮮半島から来たものを日本化していくという日本文化の心根を通じてどう伝えていくのか。そのような大きな時間軸、空間軸も含めて、見せ方を考えていくターニングポイントにあるということ、今日の会議で改めて確認できた。貴重な御意見をいただき、改めて感謝申し上げたい。

和田座長：世界遺産も新施設も、できてからが本当の出発点であり、その先が大変だ。みんなで協力して進んでいければよい。

作田課長補佐：次回、第37回の検討会は令和7年6月を予定しており、明日香村での現地視察と会議を併せて行えればと考えている。次年度の検討会委員の委嘱の手続も進めていくので、確定した日程をお知らせしていきたい。

以上